

米國・ペリーの「黒船」、ロシアのプチャーチン提督。開國などを迫る列強の対日圧力が強まっていた一九世紀中葉の江戸末期、今の埼玉県川口市で国防用の大砲生産に励む鑄物師がいた。増田安次郎。日本近代砲術の祖といわれる高島秋帆の協力も得て造った大砲（カノン砲）は、五年間で二百十三門にもほり、全国各地に配備された。

安次郎から数えて九代目、増田幸也氏。父が社長を務める増幸産業の本社の正門脇には、復元された一門のカノン砲が鎮座し、立て札にはこうある。

「鍋釜の鑄物づくりから大砲の鑄造に乗り出すのは想像におよぶるある挑戦だった。百五十年を経た今も、当時のチャレンジ精神を受け継ぎ、『小さな大企業』を目指しています」

百五十年後の挑戦とは。「天然に存在する物質で最も硬いダイヤモンド以外のすべての物質を『超微粒化』、つまり極限まで碎き尽くし、究極的には一卵を

未知の「有」生む超粉碎機

超えた一ナ（十億分の一）の超微粒化を目指す。物質をいわば「無」に帰した上で資源リサイクルや省資源、公害防止、新素材開発などに役立つ未知の「有」を生み出す創造的粉碎だ。

会社案内を素人記者なりに噛み砕いて「説明すればこうなるか」。

増幸産業には全国の業者から野菜や果物、肉、魚、香辛料といった食品や繊維、医薬品、金属、樹脂などありとあらゆる物質が持ち込まれ、テスト室を独特の臭いでブンブンさせながら「摩砕」実験が行われる。

「米デンプン社が開発し、耐熱性と耐衝撃性などに優れたケブラー樹脂を業者の依頼でさらに『毛羽立たせるように粉碎した』新繊維は、スポーツシャツの外壁や防弾チョッキの素材となった。サトウキビを搾ったあとの茎やコーヒの搾り滓を粉碎すれば熱効率

のよい燃料にもなる」と幸也社長は明かす。

全国のスーパーなどの食品売り場に並ぶ各種ペースト、ジュース、ジャム、スープ、ポタージュ、ソースなどで同社粉碎機の手にかかっている製品は皆無といっても過言ではない。国内シェアは九〇％を超える。

これまでの挑戦の先兵にして独自のなか核商品となってきたのは先代の故増田恒男社長が昭和四十年に開発した「スーパーマスコロイター（超微粒粉碎機）」だ。

戦後、復員して細々と鑄物工場を始めた恒男氏は、豆腐作りの第一段階に使う古来の石臼の原理を

使った大豆粉碎機を考案し、販売していた。

折しも、アスファルトの改良に腐心していた東大生産技術研究所が、石炭の超微粒化のためこの大豆粉碎機に注目し、両者は粉碎機の高性能化に着手した。失敗を重ねて苦節約七年。ようやく超高速回転でも粉碎機の砥石が割れない技術開発に到達、「スーパーマスコロイター」は世に出たが、皮肉にもアスファルト技術自体が進歩してしまい、粉碎機は一機しか売れなかった。

途方に暮れていた恒男氏が昭和



「スーパーマスコロイター」を実演する増田幸也社長



増幸産業の会社概要
 ◇本社—埼玉県川口市本町1の12の24
 ◇資本金—1000万円
 ◇従業員—25人
 ◇業務内容—産業用粉碎機、摩砕機製造など。具体的には超微粒粉碎機（スーパーマスコロイター、セレディピター他）、超精密カッティング機（マイクロマイスター）、衝撃式粉碎機など
 ◇特許—日本を含む12カ国の特許を取得。特許総数は65にのぼる。

五十年代前半、たまたま歩いていた上野の肉屋の店頭に山積されていた鶏のトリガラを分けてもらい、マスコロイターにかけてみた。すると、「裏にあざやかなピンクのすり身肉」が出てきたのだ。これが「骨を肉にする小さな企業」。「安価で栄養満点の新しい食肉素材」とテレビで報道され、増幸産業は一気に商運をつかみ取った。

「一番参ったのは処理場の人糞を『燃料にした』と持ち込まれた時でしたが、『新しい塗料用』と髪の毛の粉碎依頼もあった。地下鉄サン事件の数年前にはオウム真理教（現アレーフ）の信者がやってきてスーパーマスコロイターを二機、ポンと買っていた。変なことに使われていたけれどいいのですが。実は顧客の半数以上は粉碎する原材料が何なのか、教えてくれない世界なのです」

子供は五人で男が三人。長男の幸介さん（三）は米國留学中だ。「四年後を目途に米國に支店を出し、将来は日本、米國、欧州と三つの拠点を築きたい。それが夢ですね」

「挑戦」に終わりはない。
 （産経新聞編集特別委員）

江戸から平成すたれぬ挑戦魂